結草
kusamusubi
No.13

publishing house:2-19-32Moriyama Kanazawa
Jodo Shinsyu Jhokoji phone 076-252-4922
www.jhokoji.net/ info@jhokoji.net 2013.07.01

篤く三宝を敬え

大谷大学名誉教授　木村　宣彰

どうも皆さん、木村でございます。どうぞよろしくお願いいたします。顔馴染みの方もできておりますけども、もう十年ちょっとになるかもしれませんね。大変なご縁を頂いて本当にありがたいと思っております。私は、この浄光寺のお太子さんに遇わせて頂く度に新しいことに気づくんですよ。あっ、なるほどそうだったのか。いやぁ生きていてよかったなと。十年ってことは、十年間に渡ってこちらに寄せていただいてどれだけのことを私は勉強させていただいたか、本当にありがたいことだと思っております。

感応道交

今日は、穏やかなお彼岸で例年の通り浄光寺さんのお太子さんが勤まりました。さきほどご住職さまが拝読されたお太子さまの縁起によると十六歳の像だと。私は十六歳からもう五十数年生きたんだなあと思ってしみじみと考えさせられました。また、ちょうどお太子さま、七高僧の前でお勤めを聞かせていただきました。聖徳太子さまは実際に声をお出しになって私に声をかけていただいていないのですけれども、お太子さまのなにかお心というか、教えが伝わってくるのです。そんなことはないとお思いかもしれませんけれども、それがやっぱり感応（かんのう）ということですよ。こちらとお太子さまと、あるいは我々衆生と阿弥陀さんの間に「感」と「応」、感ずれば応ずる。善導大師（ぜんどうだいし）も憶念すれば必ず応じていただくのだ、こういうふうにおっしゃっていますね。

今はなにかメールだとか声が聞こえなかったら話も出来ないように思っていますけれども、そんなものではないと私は思っています。だって私は今、母親と離れていても母親が私のことを何を考えているか大体通じますよ。だから声が聞こえなくても、姿が見えなくても、通ずる世界があるということですわね。聖徳太子さまに対する親鸞聖人の思いはまさしくそういう思いを語っていらっしゃると思います。それが感応道交（かんのうどうこう）。こちらが何も思わなかったら向こうも返事がないかもしれません。こちらが思えば必ず応ずることだと私は確信をしておるんですね。そういう話をさせていただきたいと思うのです。

因縁

今日、寄せて頂く途中、良いお天気でよかったなと思っていたのですが、なんとなく空がモヤっとしていますよね。途中でお会いした方に聞いたら「これは黄砂ですよ」とおっしゃっていました。黄砂というのは、中国のはるか西のタクラマカン砂漠かどこか向こうの方から飛んでくるわけでしょう。何千キロという距離を飛んで。私はその話を聞きながらこれを思い出しましたね。なぜ黄砂が起こったのか。やっぱりなにか原因がなければ起こらないわけですよ。

何千キロも遥か彼方から砂が飛んでくる。最近はPM2.5というややこしいものが加わっておる。でも距離が離れているだけじゃなくて、様々な因縁があると思うのです。その縁の一つが皆さんもご存知の秦の始皇帝。あの広大な中国を統一をして中国をまとめた最初の皇帝ですから名前にわざわざ始皇帝と。始皇帝は紀元前２００年ほど前、今か

ら二千年以上前の皇帝です。そんな人、私たちとは関係がないと思うかもしれない。しかし、縁にも逆縁もあれば順縁もあっていろいろな縁があるわけで、無関係ではないと思うのですよ。

秦の始皇帝の大きな仕事をご存知ですわね。あの万里の長城を造ったわけですよ。秋になると食べ物が美味しくなって、馬も段々元気になるから、遊牧民の匈奴（きょうど）とか鮮卑族（せんぴぞく）というのが馬に乗ってバーッと中国に攻めてくる。そこで困ったもんだから、塀を造って攻めこまないようにしましょうと言って長城をずーっと造ったわけですよ。

宮田　兎和子

私たちは、天高く馬肥ゆる秋といって、食欲の秋だと思っているけれども、あれはもともと秋になると馬が元気になって、やがて遊牧民が馬に乗って攻めてくるぞという警告の言葉だったのですよ。攻めてくるのが困るからといって秦の始皇帝は長城を造ったわけですよ。

教科書で人類の造った最も大きな建物だとよく聞いている。でも、どうでしょうかね、あれだけの長城をレンガで積んであるわけですよ。私も万里の長城を訪ねたことがあるのですが、今みんな世界遺産の万里の長城のレンガを取って来て自分の家を造っているんですよ。買うてこなくてもそこにあるのを使って積み上げれば家が出来るのだからそのレンガを自分の家の塀にしたり、土台にしたりして。じゃあ、その万里の長城を造ったレンガはどうして作ったんですか。土はどこからか掘り起こすのでしょうね。でも焼かなければならないではないですか。紀元前の秦の始皇帝の時代に石油も重油もないわけですから、やっぱり土をコネて四角いのを作ってそれを全部焼かないといかん。焼くためには薪が必要じゃないですか。薪はどこにあるんですか。「あそこに木がある、薪だ、切ってこい。どんどん木を切りなさい」と。それで果てしなく切っていった。切ったら、植林すればいいですけれど、そんな面倒なことはしないわけですよ。それでは段々緑がなくなりますよ。

さらに、秦の始皇帝のお墓、兵馬俑坑（へいばようこう）。立派な等身大の兵隊さんだとか色んな人たちが何万体もありますよね。今まだ埋まったままのもある。あの数、見ただけでも数えきれない。あれを焼くためにもどれ位の薪が必要ですか。また木を切ってきなさいということになりますよ。

計算した人がいるのかいないのかわかりませんけれども、あの長城のレンガを全部、薪で焼こうと思ったら金沢市内はハゲ山になりますよ。中国の皇帝というのは権力０００を持っているから、自分の思ったことはなんでもやる。そのためにはどれだけの薪が必要か、どれだけの木を切り倒したか。二千年以上経ってそれが今日の黄砂に影響していると私は思いますよ。そういうものが、縁ですから無関係ではない。それだけだとは言いませんけれどもそれは大きなはたらきといいますか、条件になっている。

仏法に遇う縁

秦の始皇帝はご存知のように自分は死にたくないから、長生きしたいから、不老不死の薬を探せと日本にまで徐福（じょふく）という使いを遣わせている。命令された人は気の毒ですよね。そんな死なない薬なんてあるはずがないのだから。「皇帝様、いやーすみません、日本まで行ってきたけれどもありませんでした」、そんなことでは殺されてしまうから、帰るに帰られなくなって和歌山県のところに徐福はそのままとどまって帰れなかった。皇帝様というのはそこまで考えるのですね。

もし秦の始皇帝が仏法に遇うとったらどうなのか。これ想像を言ったらいけませんけれども、あの時代にまだ仏法は伝わってませんでしたね。インドには仏法があったけれども、中国には伝わっていない。後漢

の明帝が夢を見た。身体が光ったものを見たけれどもあれは何だ。仏法を知らないもんだから、何の夢を見たのかわからなかった。あれは何だと言ったら家来の中の物知りが、あれはインドにある仏さんというものですよと。それじゃあ、仏さんの教えに会いたいと言って、初めて使いを出して仏法が伝わってきた。

秦の始皇帝は二百年以上前の人ですから、仏法に遇うことができなかった。もし仏法に遇うたらそんな不老不死の薬を探しに家来を日本まで派遣もしなかったでしょうし、あるいは沢山の焼き物を焼いて植物を切らなかったかもしれませんですね。これは「かも」ですよ。わかりませんけども、そうだとすれば、もし仏法に遇うた王様と仏法に遇うていない王様とやっぱり生き方が全然違いますわね。もし秦の始皇帝があと何百年か後に生まれて仏法に遇うていたら生き方が、生きる姿が変わっていたかもしれないし。また自然に対する対応も違ったかもしれませんですね。現に後漢の明帝は仏法を迎えてお寺も造り社会も変わり、明帝の生き方も変わってきたわけです。もし秦の始皇帝が仏法に遇うていたら、長城を造らずにお寺を造っておったかもしれませんし、そうすると黄砂が飛んで来なかったかもしれませんね。

聖徳太子と親鸞聖人

それやこれやを考えると仏法に遇うということが大変なことだと思うんですね。その縁に遇わせていただくということが。何気なく生まれた時から仏法があって、お念仏で南無阿弥陀仏とこういっておると私たちは思いがちですけれども、それは大変な縁を頂いていることだと思うのですね。

先ほど皆さんで唱和されたこのご和讃。これは『正像末和讃』の中に入っている皇太子聖徳奉讃のご和讃ですけども、親鸞聖人は全部で五四四首位のご和讃をおつくりになっている。そのうちの二百以上が聖徳太子のご和讃ですよ。ということは、聖徳太子に対する特別の信仰というか思い入れがあったと思うのですね。七高僧のご和讃もおつくりになられましたね、またお浄土の姿を描かれたご和讃もおつくりになった。しかし、二百以上が聖徳太子に関わるもの。じゃあ、親鸞聖人はお太子さんをどう思っていらっしゃったのか。

もし仏法に遇うことができなかったら、いったい日本はどうなるんだろうということを親鸞聖人は丁寧に考えられたんだろうと思いますね。人間というものはですね、私もだんだん歳をとってきて人間とは何かということを考えるんですけども、人間の一番の特色は死者を弔うということだと思う。亡くなった人を弔う。何気なくこれはお寺の仕事だと思っているかもしらんけども死者を弔うということはね、人間の最も尊いことですよ。犬や猫が亡くなった子どもを背中に乗せて弔っていますというのは見たことがない。あるいは人間の遺伝子と殆ど違わないような霊長類でも亡くなった親や子どもの弔いをするということはないと思いますね。やはり人間の持っているとても尊い行い。それとやっぱり人間というのは、考えるということが人間のとても大事なことだと思いますよ。親鸞聖人はやっぱり日本の仏法がどうやって伝わったのかということを考える。

声を聞く

さきほどそこに座ったら目の前がお太子さんの像です。「あぁ『三経義疏』の中にこういうお言葉があったな、『十七条憲法』にはこういうことを太子はおっしゃっておったな」、やっぱり声は聞こえないけれども私の心のなかに太子のおっしゃっている思いがこう興ってくる、こういうことがさきほど言ったこの感応ということだと思うのですね。

皆さん、お手元のご和讃に「十方にひとしくひろむべし」とありますね。あるいは「上宮皇子方便しの有情をあわれみて　如来の悲願を弘宣せり　慶喜奉讃せしむべし」。「べし」というのは命令でしょう。誰が誰にこれを命令なさっているのですか。「和国の教主聖徳皇　広大恩徳謝しがたし　一心に帰命したてまつり　奉讃不退ならしめよ」と。これ命令だとするとどうですか。親

鸞聖人は「弟子一人ももたず」とおっしゃっているのですから、弟子をお持ちになっていない。みんな御同朋御同行だとこうおっしゃっておる親鸞聖人が一体誰が誰に向かって「べし」と。これは親鸞聖人が自分のお弟子さんだとか他の人におっしゃっているんじゃなくて、まさしく阿弥陀さんの声を親鸞聖人が受け止めていらっしゃる。自分自身がこうしなければいけないと受け止めていらっしゃる。だから阿弥陀さんからのお声を、声はないかもしれないけれども、受け止められたのを和讃にしたためられたわけですよ。そういうふうに受け止められた親鸞聖人が聖徳太子をどのように思ってらっしゃったか。

勢至菩薩と法然上人

親鸞聖人は『三帖和讃』というものをお書きになった。『浄土和讃』、『高僧和讃』、そして『正像末和讃』。『正像末和讃』の後のところに聖徳太子を奉讃しなさいということを書いたご和讃が入っておる。

『浄土和讃』を見ると、お浄土のことがずっと説かれているんですけれども、その最後のところにどういうことが書かれているか。こういう和讃です。「念仏の人を摂取して　浄土に帰せしむるなり　大勢至菩薩の大恩　深く報ずべし」。

阿弥陀さんには三尊いらっしゃる。お釈迦さんにも三尊いらっしゃる。お釈迦さんには阿難と迦葉。お釈迦さんの後をずっとついて生活をした阿難というお弟子さん。それから摩訶迦葉の迦葉。阿弥陀さんは、「浄土に帰せしむるなり」、そのお役をされておる大勢至菩薩の大恩を報じなさいと。

七高僧、すなわちインドの龍樹菩薩、天親菩薩、中国の曇鸞大師それから道綽禅師、善導大師、日本の源信僧都、源空すなわち法然上人。あそこに七高僧が掛かっておる。この高僧伝の一番最後は法然上人です。何を申したいかというたら、親鸞聖人は大勢至菩薩の生まれ変わりが法然聖人だと思ってらっしゃるわけです。法然上人とは歴史上の人物だとこうお思いでしょうけども、親鸞聖人はそういうふうに思われた。

もう一つ、阿弥陀さんの脇士は観音菩薩ですよ。では勢至菩薩と観音菩薩、どう違うのか。「観音勢至もろともに」と有名なご和讃にありますが、勢至菩薩は智慧、観音さんは慈悲を象徴している。智慧と慈悲。慈悲がなかったら、いくら智慧があっても娑婆にはたらきを持たない。慈悲があって初めてそこにはたらきというものがでてくる。

頭では人に親切にすればいいと分かってますよ。でもそんな面倒臭いことはと言ったら実際のはたらきにはならないわけですよ。智慧があっても慈悲がなかったら、社会の中ではたらきにならない。お母さんだって自分がお腹を痛めて子どもを産んだからって、そこに子どもに対する愛情というものがないと、子育てが出来ないと思いますよ。智慧というものを具体的にはたらきあらしめるのは慈悲というものがあって初めて大きな力になるわけで、だから慈悲がとても大事なわけです。

今言ったように、『浄土和讃』のところに「大勢至菩薩の大恩　深く報ずべし」、大勢至菩薩、智慧の菩薩の大恩に報いなければいけないと。大勢至菩の大恩深く報ずべしとこう親鸞聖人はおっしゃる。これが『浄土和讃』の結讃です。結讃ということは結びでしょう、結論ですよ。

そして、次の『高僧和讃』の一番最後はなにかといったら法然さん。法然さんはどういう人だったのかといったら、智慧の法然房。比叡山の中にお念仏の教えを広められた。比叡山に何千人もいた中で最も優れてた。しかし、ご本人は私は愚痴の法然房だとこうおっしゃる。戒・定・慧の三学の修行なんか出来ない人間だとご本人はおっしゃっているけれども、周りの人は智慧の法然房だと言っておる。自分で私は智慧の法然房だと言ったら誰も尊敬しませんよ。でも法然上人ご自身は、私は愚痴の法然ですと。戒律を守って精神を集中して坐禅をやって智慧を磨くなんてことはとてもできない人間だ。三学非器という。仏教の学びで一番大事な三学をやることはできない、そういう器ですよと。自分で愚痴の法然房だと。愚痴とは愚かとい

うこと。

親鸞聖人は、自分のお師匠さんの法然さんはやっぱり智慧の法然房で勢至菩薩の生まれ変わりだと思われた。ここのご和讃の中に、「源空勢至と示現し　あるいは弥陀と顕現す　上皇群臣尊敬し　京夷庶民欽仰す」と。「源空勢至と示現し　あるいは弥陀と顕現す」、法然上人は勢至菩薩の生まれ変わりだ、勢至菩薩の化身だとこうおっしゃっておる。勢至菩薩が娑婆に現れた化身だと親鸞聖人は受け止められた。そんなことは証明出来ませんけれども、そういただいておられる。

そして、「上皇群臣尊敬し　京夷庶民欽仰す」、法然さんを高倉天皇だとか後白河上皇が非常に尊敬したんだという和讃があるんだけれども、戦争中は読めなかったんですよ。そんな天皇陛下が法然上人を尊敬し拝んでいたなんてそんな馬鹿なことがあるかといって、戦時中はご法度。

でも親鸞聖人はこのご和讃の中で源空、法然房は勢至菩薩の生まれ変わりだと和讃の中にずっと書いてますね。だから七高僧のご和讃をずっとお作りになって、『浄土和讃』の結びが「勢至菩薩の大恩ふかく報ずべし」とこういうふうに結ばれて、そして今度は『高僧和讃』の最後は法然さんのご和讃で終わっている。法然さんは、どういう人かといったら、大勢至菩薩の生まれ変わりだ、化身だ。

観音菩薩と聖徳太子

じゃあ、慈悲の観音さんの生まれ変わりは誰か。そのことをお書きになろうと思って『正像末和讃』を書かれたのだろうと私は思うのですね。『正像末和讃』に、今皆さんお持ちの聖徳太子奉讃の和讃が載っていますが、聖徳太子は救世観音だ。世を救う観音さまの生まれ変わりだと思ってらっしゃる。智慧の勢至菩薩と法然上人は一体。慈悲の観音さまと聖徳太子さまは一体だ。要するにこの世の中に聖徳太子のお姿をもって現れていただいたのが阿弥陀三尊の観音さま。こんなことは伝説だろうとお思いかもしれませんけれども、親鸞聖人は間違いなくそのように受け止めておられた。

『正像末和讃』の中には尊い和讃が沢山ありますけれども、そこにあえて聖徳太子奉讃のご和讃を入れられた。「救世観音大菩薩　聖徳皇と示現して　多多のごとくすてずして　阿摩のごとくにおわします」、救世観音が聖徳太子となって現れていただいた。多多というのはお父さんのこと。阿摩はお母さん。また「大慈救世聖徳皇　父のごとくにおはします　大悲救世観音　母のごとくにおはします」、聖徳皇太子さまはまさしく慈悲の救世観音が世の中に現れていただいた化身のようなものだと。私たちは聖徳皇太子は外交官で政治家で摂政だと、こう歴史で習っているわけだけれども、そうではなくてまさしく私たちにお父さんや母のごとくにおわしますと。

聖徳皇太子さまは、反対する人達もたくさんいたけれども、初めて日本で仏法を受け入れてくれた。そのことが親鸞聖人からすれば、そのお陰で私はお念仏の教えに遇うことが出来た。このことの感謝はどれだけ感謝しても感謝しきれない。お前はなかなか気が付かないだろうけども、「奉讃不退ならしめよ」、如来大悲の恩徳を忘れないようにしなさいよと阿弥陀さんが私にそう仰せではないか。親鸞聖人が阿弥陀さんのお声を心の内で聞いていらっしゃる。だからそれを人にどうこう命令しようとされているのではなくて、それを自分で聞く。親鸞聖人は阿弥陀さんのお慈悲と智慧、観音・勢至を通して、あるいは現実の中で法然上人や聖徳太子を通して自分の心の中に聞こえてきた。親鸞聖人は聖徳太子さまを救世観音として受け止めておられる。

十七条憲法と和讃

『正像末和讃』のところに救世観音の生まれ変わりだと親鸞聖人は詠ってらっしゃる。その後にまだ七五首の和讃だとかあるいは百何首の和讃をお作りになっている。八三歳から八四歳の時に。なぜそういうものをお作りになったのか。それはちょうど親鸞聖人の八三、四の時に息子の善鸞を義絶しますよね、縁を切るわけです。なぜかといったら、関東で念仏を広めたらアカンということに

なってぐちゃぐちゃになったんですよ。そのことを機縁としてもう一度聖徳太子のことを親鸞聖人は大変に考えられた。そして太子の和讃をその後も沢山お作りになった。

皆さんもご存知の『十七条憲法』というものがあります。一番最初は「和をもって貴しとなす」。親鸞聖人は七五首和讃と言われる聖徳太子のご和讃に十七条ある憲法の中のどの条項をご和讃にされているのか。私はそこに親鸞聖人の大変な思いがあると思うのですね。

「憲章の第二にのたまはく　三宝にあつく恭敬せよ　四生のつゐのよりどころ　萬國たすけの棟梁なり」憲章といったら『十七条憲法』のこと。第一条の「和をもって貴しとなす」、仲良くしなさいというのが尊いようだけれども、それを書いてらっしゃらない。その第二条、篤く三宝を敬えという条項と第五条の「財有るものが訴えは、石をもって水に投ぐるが如し。乏しき者の訴えは、水をもて石に投ぐるに似たり」、富める者、大金持ちで力がある権力者は、訴えたら石を水に入れるが如し、池の中に石をポーンとやったらスーっと通っていきますわね。

乏しき者、力もない、お金もない、地位も名誉もなにもない、要するに私たちのような力のない者の訴えは、水をもて石に投ぐるに似たり。水を石にパーンとかけたらどうなりますか。石が壊れますか、石に跳ね返されますよ。石は何にも壊れない。七五首和讃は結讃、結びです。七五首の結讃は「とめるものゝうたへは　石を水にいるゝがごとくなり　ともしきものゝあらそひは　水を石にいるゝにたりけり」憲法第五条から引いていらっしゃる。

私だったら何となく「和をもって貴しとなす」、仲良くしましょうよと言いたいところだけれども、そうではなくて篤く三宝を敬えと。それは何故か。本当の拠り所がはっきりしなかったら世の中いくら仲良くしましょうと言っても駄目だ。何をもって拠り所として生きるか。お金を拠り所とするのか、仲間を拠り所とするのか、仲間を拠り所としたら派閥ができますよ。いじめの構造になってきますよ。そうではなくて仏法をよりどころとしなければ、世の中は絶対によくならない。仏法僧の三宝を拠り所としなければならない。『十七条憲法』の憲法はみんな尊いですよ。尊いけどもその中の二つを挙げればまずこれだ。

生きている人も生きていない人も、若い人も若くない人も、すべての人々がみんな仲良くできる社会を作る。今の社会曲がっているではないか。何で曲がっているかということを親鸞聖人は実感された。正しい念仏の教えが弾圧されたからですよ。鎌倉の幕府の人達が弾圧しとるわけです。その曲がったものを直すためにはどうしたらいいのか。また、今の娑婆の曲がり方はどういうものかということを二つの憲法でお書きになったんだろうと思います。

本当の拠り所

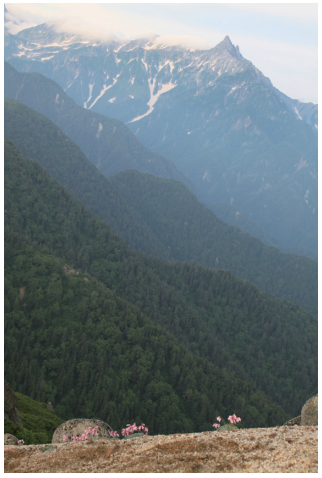
私たちは何を拠り所にして生きるのかということが、やっぱり問われておると思いますね。この間、三月十一日、東日本の大震災があって二年が経った。政府の主催で追悼会がありましたね。その時に気になったことがある。要するに政府主催ですから、式辞、今日の追悼会というのはどういう意味を持っているのかということを最初に主催者である総理大臣が述べるわけですね。首相の式辞で安倍総理がこういうことをおっしゃっている。亡くなった人たちに対して「天国で私たちを見守っている犠牲死者たちの御霊に報いる道」と。亡くなった人たちに対して天国で私たちを見守っている犠牲死者たちの御霊だと。これは犠牲者に寄り添っていることではないですよね。生きている私たちを、生きている者の傲慢ではないですか。天国で私たちを見守っている、亡くなった人たちが私たちを応援してくれているはずだ。それを見守るために強靭な国造りを進めていく。御霊に報いることが強い国を造るんだとこうおおせになった。また、ある時こういうこともおっしゃったね。「戦争の犠牲者は靖国神社の英霊だ」。そうしたら戦争の犠牲者は靖国に、大震災の犠牲者は天国で私たちを見守る。

出席された福島のご遺族の方は、こんなことをおっしゃっておったで

すね。「私の住んでいる南相馬を福島を日本を背負っていたであろう方々、夢、志半ばにしてお浄土に行ってしまわれました」。福島の犠牲者はそうおっしゃっておる。でも総理大臣は、天国で私のことを応援してくれる、それに報いるために強靭な国を作るんだと。亡くなった人と私たち生きている者とは、亡くなった人とはモノではないんですからね、死者といっても言葉はないかもしれないけれども、亡くなってモノとなっているわけではない。さきほど言ったように親鸞聖人が観世音菩薩や勢至菩薩と対話なさるようにそれが寄り添うということではないかと思うのですね。現に親鸞聖人や蓮如上人は御同朋御同行、世々生々父母兄弟だとこう仰せになる。やっぱりそういう姿勢が必要なんではないか。それがなかったらだんだん曲がっていきますよと親鸞聖人はご和讃の中にお書きいただいている。

　最も拠り所とすべきものは何か。強い国を作ることが目的ではなくて、やっぱりみんなが共に生きられるような国を作らなければならない。そのためには何を拠り所にするのか。それが仏法僧、仏法だと。さらに親鸞聖人の『教行信証』の中にこういうことが書いてありますね。末法の道俗、もう末法に時代になったらお坊さんもそうでない人たちもみんなこれを拠り所としなさいと。その中に、依智不依識（智に依って識に依らざれ）仏さんの智慧に依りなさいと。識というのは何かといったら、難しいことを書いてあるけども、目・耳・鼻・舌・身・意、要するに私たちの五感ですよ。外から声を聞いたり、美味しいものを食べたり、いい匂いを嗅いだり、肌触りのいいものを求めたりする感覚、それを五識というわけですよ。そういう識に依って物事を考えておったらどうなるか。識に依れば常に楽を求める。美しいものを見たい、美味しいものを食べたい、いい音楽を聞きたい、シルクの洋服を着たいとこうなっていく。五識に依っておったら止めどなく、常に楽を求める。

　じゃあ、智というものはどういうものか。「智はよく善悪を籌量し分別す」。これが良いことだ、これが悪いことだということを、籌量、籌という言葉は難しい字なんですけれども、はかる。常に楽を求めるのと、これは善いことだこれは悪いことだということを、籌量する、はかる。これが智のはたらきだ。しかし、識に依っておったら、必ず楽を求めますよと。それは確かに快適であることは良い事ですよ。でもそれだけを求めておったら、止めどなくなんぼ電気があってもキリがない。もっともっと快適に。やっぱり智に依らないといかん。それで良いのか。それで本当に良いのかということを考えなさいとこういっている。これ、拠り所ですよ。何を拠り所にするのか。何を拠り所にしてはいけないのか。今申し上げているのは、『教行信証』という親鸞聖人が書かれた中の化身土巻のところに親鸞聖人がお書きになっておる。



「槍岳をのぞむ」　松島　晋

　聖徳太子も篤く三宝を敬え、三宝に依らなかったら曲がったものは直すことができない。娑婆が色々曲がっておるのはみんな、さきほどのように力がある人は石を水に投げるように事柄が出来るけれども、そうでない人たちはできない。それは曲がった世の中だ。それをを直すことができるのは仏法しかないのだ。

　みんな都合の良いように天国にいった人は私のやることを助けてくれているんだ、守ってくれているんだ。総理大臣のことをあまり言いたくないのだけれども、ラジオで聞いておって何かちょっとおかしいな。天国で私たちのことを見守ってくれている犠牲者の御霊に報いるために強靭な国を造る。そうではなくて先に亡くなられた南相馬の方が、夢、志、半ばにしてお浄土に行ってしまいました。そう思うことの方が犠牲者に寄り添うということなのではないでしょうか。そういう生き方を日本の社会に最初に伝えていただ

いた。だからこそ親鸞聖人が和国の教主だと。しかもその聖徳太子の本地、大本は救世観音、慈悲の菩薩様の生まれ変わりだとこう受け止めていらっしゃる。

そうして、太子和讃を読んでみると、今のこの世の中こそ、お太子さんが示された拠り所が大切だと思う。何を頼りに生きるのか、健康も大事、お金も大事、友達も大事だけれども、それが全部自分の都合でやっておったら、これはキリがないじゃないですか。ちょっと外れたら腹がたって殺す。そんな風では仏法をいただいていることにはならない。だから親鸞聖人が八十歳を過ぎてから何十首もの和讃を作りあげたのは当時の社会が曲がってしまっていたから。その曲がりを直すにはもう一度仏法に依らんといかんと言って、八十半ばになってご和讃を七五首も百何首も作られておる。それはなかなかないと思う。それはやっぱり慈悲がないと作れませんよ。このことを皆に伝えなくちゃ社会が良くならないというお気持ちがなかったら絶対に作れません。みんなこのことに気づいていただくと少しでも娑婆が良くなるという、親鸞聖人のお気持ちです。その大本をただせば、太子様の救世観音の化身としての太子のお慈悲の精神を社会に生かさんといかん。和も尊いけれどもそれにも増して一体何を拠り所に生きるのか。仲良うしましょう、仲良うしましょうだけではどうにもなりませんよ。みんな仏法をいただいたら仲良うしましょう言わなくてもみんな御同朋御同行になっていくと私は思うのですね。

年に一回のお太子さんですけれども、やっぱりそのようなことを思います。そもそもお彼岸というのは彼方の世界でしょう。この娑婆世界は、「有量の諸相ことごとく」、なんでも大きいとか小さいとか、多いとか少ないとか、善いとか悪いとかそういうことばっかりを考えている世界。彼岸の世界は無量の世界、量れない。阿弥陀さんも量れないでしょ。南無阿弥陀仏、そういうのを超えた世界。そういう世界からもう一度私たちの世界の生き方を振り返ってみる。そこにやっぱりお彼岸ということの大事な意味があるのではないでしょうか。ぼたもちも大事ですけども、ぼたもちだけではなくてやっぱり彼岸の世界から我が生き方を振り返ってみる。

最後にひとつだけ言いますけれども、最後までずっと残って思い出すのは、その人の生き方ですよ。あの人は、でかいこと素晴らしいネックレスを持っていた。お金を持っていたといったってそれは忘れ去られますよ。でも「あぁ、あの人の生き方は素晴らしかった」と、感動するということがやっぱり伝わってくる。親鸞聖人は聖徳太子さまのその慈悲に基づいた生き方を尊いと思われたんだろうと思いますね。どうもありがとうございました。

＊行事のご案内＊

「盂蘭盆会」七月十三～十六日

「追弔会」　八月十三日（月）十時～
法話ライブ・霊河秀樹（福井県・玄性寺住職）による
法話と歌とギター演奏♪

「きこまいけ」毎月二十八日・午後二時～
※「正信偈」の練習と教え

《へんしゅうこうき》

◇前回に引き続き仙崖和尚の話です。考えさせられるところ大ではありませんか。その一つ。女将はどうやら私なんでしょうな！凡愚の代表なんでしょう。見かえりを期し人助けをしたわけではないのだが、結果的にはその行為が謝意を要求し、それがないというと腹を立て、相手を罵倒していくことになる。自分の利を言えばいうほど、折角の行為はたちどころに吹き飛んでしまう。あさましきものなんだなぁ。そんなんならはじめから助けなければええのになあ！しかしそんなことはできんわな！人間だもの！よくあるお話でしょうが！自分のやった行為はその行為で自分を苦しめていくことになるんですよ、又助けなかったらそれはそれで自分を苦しめることになる。

そこを曇鸞さまは「如蚓蠖屈伸蟲循環　如蠶繭自縛　哀哉衆生締結不解此三界　顛倒不浄」（『浄土論註』）とお示しになった。あゝ！哀れなるかな娑婆界に縛られて蚕繭の自縛するがごとし。蚕繭の姿そのものなんだと。蚕繭とは蚕の繭のこと。蚕が自らの繭で自らの体を縛るように、自らの思いに縛られ、苦しんでいる人間の姿そのものなんです。言わんでもいいことというてね！本人にはわからんわな！ところで、わたしたちは？　（受）

◇本文は平成二五年三月二〇日「おたいしさん」の法話録であります。洵に勝手ながら紙片の都合上、割愛、編集させていただきました。